

グラヴィア
地域は舞台

現代版組踊「肝高の阿麻和利」
(沖縄県うるま市)

感動体験が
子ども達を
変えた

今、全国各地の地域文化の現場では、

新たな変革の波が起きている。



現代版組踊「肝高の阿麻和利」

15世紀に勝連城最後の城主として活躍した英雄・阿麻和利の生涯を、地元の中学・高校生が演じる。2000年に勝連町教育委員会の主催で初演、現在は父母の会を母体とする「あまわり浪漫の会」が主催。2005年からは、二市二町の合併により誕生したうるま市在住の中・高生約180人が公演に参加し、これまでに延べ12万人を超える観客を動員している。2010年、サントリー地域文化賞受賞。



世界遺産に登録された勝連城跡。城の眼下には、太平洋が広がる(上)。リハーサル風景。照明や音響などの裏方はプロがしっかり支える(左・左下)



練習や公演の拠点となっているうるま市「きむたかホール」

沖繩本島中部東側に位置する勝連半島。かつて沖合にジュゴンが生息したというこの美しい半島の付け根付近、南側の小高い丘の上から人々の営みを見守るかのように静かにそびえる石積みみ巨大な遺跡が勝連城跡である。

二〇〇〇年に世界遺産にも登録されたこの城を舞台に、今からおよそ五五〇年前、阿麻和利という名の按司(王)が活躍した。

十五世紀、勝連城最後の按司としてこの地方を治めた阿麻和利は、漁業や貿易で地域を繁栄へと導き、民衆のために尽くした英雄であったことが近年の歴史の再検証により判明している。

琉球古謡の「おもろさうし」の中では、肝高の阿麻和利、十百歳ちよわれ(志し高き阿麻和利様よ、

一千年後までも君臨してください)と讃え語られる民草の王であった。その一方で、琉球王朝の正史ともい

える「球陽」や「中山世譜」といった歴史書には、首里王府に反旗を翻した逆賊と記されている。また沖繩の伝統芸能である組踊の代表的な演目「二童敵討」では、ライバル護佐丸を計略によって滅ぼし、さらに首里王府への謀反を企てた挙げ句、護佐丸の遺児達の敵討ちにあつて殺されてしまう反逆者として描かれている。

結果として阿麻和利は長い間、歴史における逆賊・反逆者というイメージを一般に印象づけられてしまっていた。

二〇〇〇年三月、勝連町(現・うるま市)教育委員会の上江洲安吉(現・うるま市)教育委員会の上江洲安吉教育長の発案により、阿麻和利を主人公に、地元中学生らが演じる現代版組踊「肝高の阿麻和利」が勝連城跡にて初めて



子ども達に語りかける上江洲安吉・元教育長(あまわり浪漫の会理事)

持てずにいた。そのような意識を変えていかななくてはならない、と彼は考えていた。

当時この地域の青少年教育は、深刻な局面を迎えていた。学力低下、不登校。素直で純朴だが、どこか覇気がなく、挨拶もロクに出来ない子ども達に、教育長は危機感を募らせていた。

子ども達が、自信を取り戻し、自分を表現できる場を作り、自らのアイデンティティーでもある郷土を誇りに思う気持ちを生かせる。この舞台は、上江洲教育長のそんな志しから始まった。

上演された。

組踊「二童敵討」においてすっかり悪役のイメージが定着している阿麻和利を物語の主役に据えるというのは、当時あまりにも奇抜な設定だった。しかし上江洲教育長には強い思いがあった。

「阿麻和利の汚名を晴らさなくてはならない」

子ども達は逆賊扱いの郷土の英雄を誇りに感じることもなく、ひいては自分たちの暮らす地域に対しても誇りを

呼びかけに応じ練習に集まった中学生は、最初たったの七名にすぎなかったが、演出家平田大^{だい}一氏による、主体性や積極性そして楽しさを大切にし、子ども扱いせず、思ったことを自由に発言して良いという稽古場の雰囲気は、子ども達の心をとらえた。参加者は少しずつ増え、最終的には一五〇名にまで達した。

公演は大成功だった。勝連城跡の特設会場には、二日間で延べ四千人を超える観客が押し寄せ、大観衆を前に演じることで、子ども達はかつて経験したことのない高揚感と達成感を体験した。

公演は一回限りのイベントとして終わるはずだったが、感動体験によって舞台の魅力に目覚めた子ども達の熱い要望で、すぐに次の公演が企画された。二回目の公演からは、中学生だけでなく

行政からの補助金が打ち切られ、活動は存続の危機に立たされた。そこで「あまわり浪漫の会」による自主公演が始まった。

「あまわり浪漫の会」の長谷川清博会長は、「子ども達が一生懸命に練習する姿を見ていたら、予算という大人の都合で活動を停止するなど、とても出来なかつた。だから大人達も必死になつてチケットを売り、知恵を出し合い、自分達の力で活動を続けられるよう努力したのです」と自主運営について語る。

長谷川会長によれば、子ども達にはある時ガラッと表情や目の輝きが変わる瞬間があるという。大勢の仲間達と、時にぶつかり合い、励まし合い、夢中になって活動を続けていくうちに、他人に対する思いやりや感謝の気持ち、責任感やリーダーシップといったもの

く高校生も参加できるようになった。こうして、以後十二年間で、観客動員数延べ十二万人、公演回数二百回を超えて今日へと続く超ロングラン公演は幕を開けた。



楽屋にて。出演準備はすべて子ども達で自主的に進める



活動をとおして、子ども達は確実に変化した。不登校だった子が、いつの間にか学校へ行くようになったり、将来の夢を思い描くことの出来なかった子が、自信と希望を持つて積極的に進路を考えたりするようになったという。変わったのは子どもばかりではない。子どもが真剣に取り組む姿に感動した親達が、自分たちも何かしたいと父母会を結成し、それまで教育委員会に任せていた車での送迎や、稽古時の食事の世話を買つて出た。さらに翌年、父母会は「あまわり浪漫の会」と名前を変え、父母の枠にとらわれず、一般の賛同者も参加できる支援団体へと進化していった。

二〇〇一年、町立「きむたかホール」が完成すると、前述の演出家・平田大氏が初代館長に任命され、ここを拠点に阿麻和利の練習や公演が行われるようになった。しかし翌二〇〇二年、



(左上から時計回りに) 音楽は中高生による「きむたかバンド」の生演奏。グッズ販売は貴重な収入源。公演前、打ち合わせをする「あまわり浪漫の会」



あまわり浪漫の会会長の長谷川清博さんと事務局の加代子夫人

を自然と身に付け成長していくためであらう。

毎年行う参加希望者のためのオリエンテーションで長谷川会長は、「プロの役者やダンサーを目指すことが目的なら、ここではなくタレント養成所へ行つてください」と伝える。ここは子ども達自らが、目標へ向かつて仲間と共に歩み、感動を体験し、人としての成長を重ねていく場なのだ。

今年二月に沖縄市民会館で行われた「肝高の阿麻和利・卒業公演」に、白髭の長者「大主^{おほしゅ}」役で出演した屋良奈々美さんは、この舞台をひとことと言う



フィナーレでは、100人を超える出演者がステージに勢ぞろいする



支えてくれた両親、大勢の人々への感謝を伝える舞台挨拶(左)。終演後、ホールの外で観客を見送る子ども達(右)



舞台上には沖縄の伝統芸能がふんだんに取り入れられている。(右上から時計回りに)阿麻和利の最期。テーマソング「肝高の歌」のパーランクー。「肝高の歌」の扇子踊り。平敷屋(へしぎや)エイサーのチョンダラー。平安名(へんな)のテンテンブイブイ



と、「ハイ、大好きです」と爽やかに即答してくれた。郷土を愛し、自信を持って自分の活動に打ち込む、明るく積極的な青年の姿がそこにあった。

「おもしろさうし」のなかで、十百歳ちよわれと謡われた肝高の按司の物語は、時を超え今も地域の人々の心に息づき、故郷への誇りと、歴史に秘められた文化の豊かさに気づかせてくれる。

撮影・文 桑田瑞穂

五代目阿麻和利を演じ、二月の公演を最後に卒業した宮里成明君の普段の顔は、眉を細く整え、耳にピアスをあけた現代風の高校生だが、メイクをして役に入り舞台上に立てば、印象はガラリと変わり、古えの民草の王に相応しい、威厳に満ちたオーラを放つ。

今の生き甲斐はこの舞台で、こここそが自分の居場所だと話す彼に、私たちの街は好きですか？と問いかける



5代目阿麻和利役の宮里成明君(18歳)

なら「びっくり箱」と表現してくれた。本番前は緊張するが、いざ舞台上に立つと、何回やっても毎回驚きがあったて楽しいという。

あまわり浪漫の会
〒904-2312
沖縄県うるま市勝連平安名2925-1
TEL: (098) 978・0608
E-mail: amawari-roman@woody.ocn.ne.jp
http://amawari.com